

## 職業奉仕の在り方

ロータリアンはどのようにして職業奉仕を行うのでしょうか、行うべきなのでしょう。ロータリーのサービスは、個人のサービス（アイ・サーブ）を主眼としています。特に、職業奉仕に関してはクラブの中や業界においてもサービスができるのは会員個人を措いて他には誰も出来ないのだという認識が必要です。クラブという団体が会員に代わって職業奉仕（ウイ・サーブ）をしてあげる訳にはいきません。一人一人がクラブ組織とは関係なしに自分の心で取り組んでいく以外に方法はありません。ここに、ロータリー運動の社会制度的な特質があるのではないのでしょうか。

団体奉仕では50人から的人が集まって、たった1つの奉仕（サービス）しかできません。ところが、50人の1人1人が1つの目標に向かって行動すれば50通りの、いや100通りの奉仕（サービス）が可能ではありませんか。

団体奉仕では、100丁の鉄砲を1つの大砲に変えるという考えですが、ロータリーは100丁の鉄砲を100丁の大砲に育て、1つの鉄砲を1つの大砲に育てるという考えです。

日本の第2代目ガバナーの井坂孝さん（横浜RC 1931-1933年）は「人の為に尽くす道はいろいろあるが、日常不断にできるのは自分（個人）の職業を通してのサービスだ。その実践こそロータリーの本領である」と言っています。

「職業・仕事」には business, occupation, profession, vocation という用語がありますが、ロータリーは vocation（天職という意味）を選びました。

1915年サンフランシスコ大会で採択された11条からなる「職業倫理訓」の1条に、ロータリアンが携わる職業は天から授かった職業であること、従って職業に貴賤はなく、仕事に愛を込めて職業を倫理的に営みなさいと書かれています。分かりやすいようにこれに関するエピソードを2つ紹介します。

1つは、ホワイトハウスの廊下の隅で、リンカーン大統領がしきりに自分の靴を磨いていました。通りかかった秘書が「閣下、大統領の身分でそのようなことをなさるのは他人に見られたりすると具合が悪うございます。特に貴婦人の方に…。するとリンカーンは微笑みながら「ほう、靴磨きは恥ずかしいことかね。そりゃ少し違うよ。大統領も靴磨きも同じように世の為・人の為に働く公僕だ。世の中に卑しい業というものはない。ただ心の卑しい人はあるものだがね」

2つ目は、ロータリアンである紙製造業者の話。

忙しい割には利潤の少ない業界で運の悪い星の下に生まれたと嘆いておりました。しかし、ある日、渾然と悟りを開きました。人々が毎朝食べるパンを清潔な状態で食卓に届ける事が出来るのは、自分が作っている紙があるからこそで

はないか。

食事というのは単に食欲を満たすというだけでなく、神様が司るこの宇宙の秩序体系に起因している生命を維持するために食事を摂るのだと考えると、食事を摂ることは一つの宗教的な儀式ということになります。

欧米では一般にそう考えられ、儀式に行くにはスーツを着て正装で食堂に行かなければなりません。また、使用される食器や材料は清潔なものでなくてはなりません。彼は清潔な状態で食卓に運ぶには、自分が作っている紙があればこそと悟りました。

それ以来、彼は紙製造を自分の天職と考え仕事に愛を込めて一生懸命働くようになり、会社は悠々と栄えて行きました。

紙を作って商っていることは悟りを開いた前後と何も変わっていません。然し悟りを開いた後の彼の仕事に対する取り組む姿勢、覚悟は正に職業奉仕の中に入ってくるのではないのでしょうか。その結果、そのロータリーアンの職業を栄えさせることになるとロータリーは説いているのです。

これまで、ロータリー運動の原点は職業人の倫理向上運動であると述べ、ロータリー根幹、目的である職業奉仕について説明しました。ロータリーをもう少し知るためにもう一つどうしても知っておく必要があるのは、例会出席の意義です。

我々はどのようにして毎週一回例会に出席しなければならないのでしょうか。職業奉仕とも関係がありますので、次回、例会出席について述べます。